

子どもの確かな人権意識を育てる学習について

－専門高校での自尊感情を重視した取組の一考察－

県立奈良情報商業高等学校 教諭 西川 絹美
Nishikawa Kinumi

要 旨

専門高校で学ぶ生徒は、専門教科の学習に加え、資格検定への挑戦も重ねながら、社会で通用するマナーや規範意識を身に付ける学習も積んでいる。普通科高校とは違う多様な学習を行う状況の中で、自尊感情を重視して人権意識を培う取組を人権教育ホームルームを中心に行った。その結果、周囲への信頼感や人権意識の向上が見られた。

キーワード： 専門高校、自尊感情、人権教育ホームルーム、資格検定、規範意識

1 はじめに

近年、人権教育において、他者を尊重するためには、まず自分自身を尊重できなければならないという視点から、セルフ・エスティーム (self-esteem) という概念が注目されており(野崎・平沢、2001)、一般に自尊感情と訳される。また、今回の研究では、特に自尊感情を「他者とのかかわりの中で、自分のよさや自分の大切さに気付き、自己を正しく理解し受容する気持ち」と捉える。

本校の第1学年(2012年度)は、会計ビジネス科2クラス、国際流通ビジネス科2クラス、情報ビジネス科1クラス、総合情報科1クラスの計4学科6クラスで構成されている。本校のような専門高校の生徒は、普通科高校の生徒と異なり、スペシャリストとなるために多くの資格検定取得を在学中に目指す。その学習は、人権教育推進の視点の一つである「一人一人の可能性を伸ばす」という自己実現の機会に通じるものである。また、学年の半数近くの生徒が高校を卒業すると同時に就職し社会で働くことを希望している。そのため、社会人として通用する人間の育成を目指し、規範意識やマナーを身に付けさせる指導も重視している。こうした指導が、生徒の自己実現の支援につながり、自尊感情の育成にも影響を与えている。また、自尊感情を育成することは、人権意識を育てる上でも重要であると考えられる。

しかし一方では、規範意識やマナーを身に付けさせるための厳しい取組や、資格検定取得の難しさが障壁となり、逆に自尊感情を低下させてしまうこともあると考えられるため、専門高校では、自尊感情を育てる取組を計画的に進める必要がある。

2 研究目的

専門高校での多様な学習や自己実現を目指す取組が、自尊感情の育成につながるかどうかを十分検証した事例は少ない。一方で、こういった取組が生徒自身を成長させているのは確かである。そこで、資格検定取得への支援を行ったり、行事や研究発表などへの積極的参加を促したり、生徒が主体的に学習することができる参加型の人権学習を活用したりすることで、自分

の努力や成長を自覚させ、自尊感情を育むことができないかと考えた。また、自尊感情を育み、人権を考える土台をつくりながら、人権を侵害された人の気持ちを理解し、自ら行動できる人権意識を向上させたいと考えた。

3 研究方法

研究対象は本校の1年生240名とする。本年度の人権学習の学年目標（表1）を踏まえつつ、人権教育ホームルーム（表2）の内容を工夫し展開した。その際に実施したアンケートやワークシートを用いて、生徒の自尊感情の変化を検証する。加えて、行事や研究発表などへの積極的な参加の有無や各種資格検定試験の合否結果が自己実現にどのようなつながり、自尊感情にどのような影響を与えるかを考察する。

表1 本年度の人権学習の第1学年目標

<ul style="list-style-type: none"> ・ 違いを豊かさにつなげ、お互いの人権を大切にす“なかま”集団を育成する。（1学期） ・ 身近な差別に気付き、加害者にも被害者にもならない、人間関係の築き方を学ばせる。（2学期） ・ 障害者問題などを通して、お互いの人権を尊重し、“ともに生きる”ことの大切さについての認識を深めさせる。（3学期）
--

表2 実施した人権教育ホームルーム

<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回人権教育ホームルーム「違いを豊かさ」 4月25日（水）実施 ・ 第2回人権教育ホームルーム「褒める」 6月6日（水）実施 ・ 第3回人権教育ホームルーム「デートDV啓発・予防学習」 11月14日（水）実施 ・ 第4回人権教育ホームルーム「力による支配、人間関係」 11月21日（水）実施

4 研究内容

(1) 現状把握と課題の確認

4月と6月に実施した進路希望アンケートの結果（表3）では、卒業後は就職しようと考えている者が4割を超えており、専門高校の特徴が顕著であった。一方、進路希望について「未定」とする者が2割を超えている。これは、同時期に実施した進路適性検査でも、「将来、やりたいことや自分に合っていることが分からない状態」にある者が、全体の22.2%あり、ほぼ一致した結果となっている。

表3 進路希望アンケートの結果

	就職希望	進学希望	未定
4月	42.0%	36.0%	22.0%
6月	40.5%	35.0%	24.5%

（調査対象：本校1年生240名）

また、この進路適性検査によると、「進路目標を設定し努力している」者は全体の28.4%と低く、進路目標はあっても具体的な努力の仕方が分からない者が多いと思われる。日頃の言動からも将来に迷ったり悩んだり、自分に自信をもてない者が多いように思う。自己を正しく理解し、自分のよさに気付き、自信をもって将来の進むべき道を決め、実際に努力できるようになるためにも自尊感情を培うことが必要であると考えた。

(2) 人権教育ホームルームでの取組

ア 第1回人権ホームルーム

本時のテーマは「違いを豊かさ」に決定した。一人一人違うからこそ豊かな発想や考えをもつなかまとなれることを確認し、互いの違いを豊かさにつなげるためにはコミュニケーションが重要であることを学ばせた。詩人金子みすゞの代表作『わたしと小鳥とすずと』の

中の一節「みんなちがって、みんないい」の意味を考えさせたり、構成的グループエンカウンター^{*1}の「四つの窓」(國分康孝ほか、1996)や「誕生日チェーン」^{*2}(國分康孝ほか、1999)と
いったエクササイズを取り入れた参加型学習を行った。

まず、最初に「四つの窓」を参考に、「互いの興味や考え方の違い、あるいは共通点を知る」ためのエクササイズを行った。生徒が興味・関心をもてそうな事柄についていくつか質問を用意し、各々の質問に応じて四つの場所に生徒を分かれさせた。その後、個々の生徒になぜその答えを選んだのかを聞くと、その理由は人それぞれであった。同じ意見の人もいれば、全く違う意見の人もいるということ指摘し、それぞれの違いや共通点を確認させた。

次に、「誕生日チェーン」を実施した。会話をせずに、自分の誕生日を身振り・手振りだけで相手に伝え、日付順になるよう円形に並ばせた。実際の誕生日を確認すると間違っていた者も多く、話さずに伝えることは難しいということが分かった。また、同じ誕生日や誕生月の人がいることを知ることができ、クラスのなかまとしての親近感ももてたと考える。

また、金子みすゞの詩なども紹介し、違いはあって当然であることや、自分と違っているからといって、単に「あの子変わってるね」という視点だけで排除をすれば、そこからいじめにつながる危険性があることを理解させた。最後に、『新たなるステージ』(奈良県教育委員会、2012)を使って、隣の人と自己紹介をしながら、交流を深めさせた。

イ 第2回人権教育ホームルーム

本時のテーマは「褒める」と決定し、褒め合うことで自尊感情を育むことをねらいとして実施した。4月からの頑張りを互いに確認し褒め合うことで、本校での学習が自己実現に寄与している自覚をもたせたいと考えた。互いに温かい励ましの言葉をかけ合うことで、クラスのなかまづくりも進めていった。この授業では相手を尊重し、互いを傷つける言葉は決して使わないことを確認してから行った。入学してから2か月が過ぎ、無遅刻・無欠席を続ける生徒がほとんどで、服装を整えることや挨拶をしっかりすることなども、かなり努力している。この機会に頑張っている生徒を励まし、自信をもたせることによって自尊感情を高めようと考え、この取組を行った。

ワークシートを配布し、各人に4月以降頑張ってきたことを五つ以上記入させた。また、今後の目標もそこに記入させた。その後、4人の班を作らせ、ワークシートに記入された頑張ってきたことに対して、励ましの言葉や褒める言葉を互いに書き込ませた。班員が書いてくれた励ましの言葉や褒める言葉に、今度は自分からの感謝の言葉を書かせ、さらに、それらを読んでどう感じたかを書き込ませた。最後に、ワークシートを見ながら感想を述べ合い、互いのことをどう思ったか、その気持ちを話し合わせた。

ウ 第3回人権教育ホームルーム

本時のテーマは「デートDV啓発・予防学習」と決定した。交際経験の少ない高校生が「デートDV」について深く知り、加害者にも被害者にもならない人間関係の築き方を学ぶことをねらいとして実施した。そこに潜む原因を探り、力による支配の問題点を理解させ、友人から相談を受けた場合の対応の仕方なども指導した。

授業では、『高校生のための“しない、されない、デートDV”』(奈良県くらし創造部男女共同参画課)の冊子を使いながら進めた。最初に冊子の中の「今すぐチェック!あなたの恋愛はどのタイプ?」を用いて、自分の恋愛のタイプを確認させた。生徒自身はデートDVに陥るような素地はないと思っていたようだが、誰にでもその可能性があり、他人事では

済まされないことに気付かせることができた。

次に、デートDVの概要を理解させるために、冊子中の事例「アドレス消してよ!」「好きなら、いいだろう!」の何が問題かをワークシートに書き込ませた。涙で操る束縛も精神的DVであり、性的暴力は特に女性に大きな精神的・肉体的な傷を負わせるものであることを確認した。デートDVには身体的暴力、精神的暴力、性的暴力、経済的暴力などがあることも説明した。さらに、「デートDV Q&A」を開いて、デートDVが起こる三つの要因として、①力による支配、②暴力容認の風潮、③ジェンダーバイアスを挙げて説明した。身近に被害に遭っている人はいないか、また、被害を受けている友達から相談を受けたらどうしたらよいかを話し合わせ、ワークシートに回答を書き込ませた。

最後に、DV被害が多い日本の現状を話し、若い交際未経験者やまだ交際を始めたばかりの人こそ、デートDVやDVのことを学んで、悲劇的な関係にならないように学習する必要があることを理解させた。また、力による支配、暴力や束縛を行う人は自分に自信がない人が多く、同時に相手の自尊感情を奪うことでもあるので、このような人間関係を築かないようにすることが、自分に自信をもてることにつながることも理解させた。

エ 第4回人権教育ホームルーム

本時のテーマは「力による支配・人間関係」と決定した。いじめや差別などによる人権侵害の被害者の気持ちや、力による支配とはどういうものかを理解させることをねらいとして行った。「指さし」^{*3}や「ヒモ」^{*4}を活用した参加型学習を実施し、いじめや差別による孤立がどういうものかを感じさせる学習をした。また、そのような場面に遭遇した場合に、勇気をもって行動できる人間になるにはどうすればよいかを考えさせた。

最初に被害者役、加害者役になる生徒を事前に募っておいた。その際、人権学習の趣旨を説明するとともに、「ロールプレイ」でいじめを受ける役をしてもいいかどうかを本人に確認した。まず、椅子を1脚用意し、被害者役の生徒をそこに座らせ、加害者役の生徒に無言で「指さし」をさせたり、腕組みをして見下したりさせた。

(図1)その後、他の生徒を第三者役として参加させた。第三者が加害者のそばにい



図1 「指さし」を受ける生徒を囲む第三者

るときには、たとえ加害者に荷担していなくても被害者には第三者が加害者と同じに見えたり、無責任な傍観者に見えるということ、また、第三者が何も言わなくても被害者の側に移動してくれるだけで、ほっとしたり力になったりすることを疑似体験させた。

次に、被害者が加害者から言われることにきっぱり断る練習を行った。また、非攻撃的自己主張(アサーティブ)の練習も行った。第三者が被害者の側に移動してくれるだけで、きっぱり断ったり、自分の気持ちを表現できたりすることを確認させた。特に、第三者がただ

の傍観者でいることが、結果としていじめや差別を助長しているということを生徒に理解させた。

さらに、「ヒモ」を使って加害者役と被害者役の2人の生徒を囲み、2人だけのルールが存在するデートDVの孤立状態を感じさせた。(図2) また、「ヒモ」でクラスの中を区切ってグループに分かれている状態をつくり、そういう場合、いじめなどがあっても他のグループは介入しにくいこ



図2 デートDVの2人だけの世界

ことや、「ヒモ」で区切られて孤立する人の気持ちを感じさせた。最後に、この授業を振り返って、自分ならどう行動するか、何ができるかを考えさせた。デートDVやいじめなどの場面で、傍観者として何もしないことは自分に対する信頼を失い自尊感情も低下することであるが、逆に何か行動ができたなら、自分に自信をもつことができると考える。

(3) アンケートの実施

自尊感情や周囲への理解、人権学習の成果を検証するためのアンケートを計3回実施した。

1回目は第2回人権教育ホームルームの直前、2回目はそのホームルームの直後、そして3回目は11月に同じアンケート用紙で行った。これらのアンケートを、1回目はアンケートⅠ(図3)、2回目はアンケートⅡ、3回目はアンケートⅢと表記することとする。

なお、本研究で用いたアンケートの各項目は、東京都の自尊感情や自己肯定感に関する研究^{*5}の中で使用された自尊感情測定尺度の自己評価・自己受容の項目を参考に作成した。

アンケートⅠ		1年()組()番		氏名()	
今後の学習に生かしたいと思いますので、名前を書いて、それぞれの質問の該当する番号に○を付けてください					
①	私にはいいところがいっぱいある	3	とてもそう思う	2	そう思う
		1	あまり思わない	0	全く思わない
②	私は自分を大切にしている	3	とてもそう思う	2	そう思う
		1	あまり思わない	0	全く思わない
③	私はまわりの人を大切にしている	3	とてもそう思う	2	そう思う
		1	あまり思わない	0	全く思わない
④	私は目標や夢を持っている、あるいは持とうと努力している	3	とてもそう思う	2	そう思う
		1	あまり思わない	0	全く思わない
⑤	私のまわり的人是目標や夢を持っている、あるいは持とうと努力している	3	とてもそう思う	2	そう思う
		1	あまり思わない	0	全く思わない
⑥	人はそれぞれ感じ方や考え方に違いがあるのが当たり前だ	3	とてもそう思う	2	そう思う
		1	あまり思わない	0	全く思わない
⑦	私は社会人になるためのビジネス教育を受けていることについて誇りに思う	3	とてもそう思う	2	そう思う
		1	あまり思わない	0	全く思わない
⑧	私は日頃いろいろなことに頑張っている	3	とてもそう思う	2	そう思う
		1	あまり思わない	0	全く思わない
⑨	私のまわり的人是日頃いろいろなことに頑張っている	3	とてもそう思う	2	そう思う
		1	あまり思わない	0	全く思わない
⑩	私は友達やまわりの人に頼りにされている	3	とてもそう思う	2	そう思う
		1	あまり思わない	0	全く思わない

図3 アンケートⅠ

(4) 日常的な取組

本校では、卒業後すぐに就職し社会で働く者が多いので、社会人として通用する人間を育てるために、1年生から日常的に様々な取組が行われている。挨拶や身だしなみ、言葉遣いなども日々指導している。5分前登校、予鈴での着席、授業開始時と終了時の「よろしくお願ひします」や「ありがとうございました」の挨拶、遅刻をした者への放課後指導、毎朝の服装や身だしなみの指導、月1度の校門指導など、きめ細かい指導が行われている。1学期間無遅刻



図4 1学期間全員無遅刻の表彰状

であればクラス表彰も行う。(図4)遅刻の総数は、1学期は6クラスで延べ28名で、2学期に入っても無遅刻を続けるクラスもあった。欠席すると専門教科で後れをとることを嫌うからか、欠席は少ない。生徒は資格検定の受検に向けて放課後残って学習したり、補習にも積極的に参加したりしている。また、行事への参加にも熱心な生徒が多い。体育大会ではクラス旗を製作するのに放課後残って熱心に取り組んだり、文化祭でも毎日遅くまで残り展示を完成させたクラスが多かった。あるクラスでは、プラネタリウムやモザイクアートに加えて、写真を使ったコラージュまで展示した。他のクラスでも、巨大なモザイクアートやつまようじアートなど、細かい作業を必要とする展示を行い、黙々と作業をしていたのが印象的だった。創立50周年記念行事では、放課後まで残って構成詩の群読練習を行った成果が現れ、生徒が主体となった式典が挙行できた。

1年生で受検する資格検定には、全商情報処理検定2級(ビジネス部門とプログラミング部門)及び3級、全商英語検定3級、全商簿記実務検定2級及び3級、全商ワープロ実務検定1級及び2級、全商商業経済検定2級(商品と流通)、その他、自主的に受ける日商簿記検定などもあり、2学期からは毎月検定受検に追われる状況となる。全商情報処理検定3級では、補習などを熱心に受けて全員合格を達成したクラスもあり、担当教員に職員室まで謝意を伝えにくる生徒もいた。全体として、全商情報処理検定3級は94%の合格率であった。2級は2クラスだけが受検したが、62%の合格率であった。

また、6人の生徒が全国高等学校生徒商業研究発表大会奈良県大会において、『十津川・桜井応援プロジェクト「さわやか♪みかんムース」』を発表し、その結果、同近畿地区大会への出場を果たした。発表に向けては、夏期休業中に自主的な活動を行い、十津川の「水」や桜井の「みかん」を生かした商品開発の研究を行った。みかんムースは桜井市のケーキ店『木風』の協力で商品化し、奈良県産業教育フェアでも販売し、好評であった。(図5)このことは、



図5 産業教育フェアでの販売の様子

この企画に携わった生徒たちの達成感や自信にもつながった。また、この6人の生徒は、体育大会のクラス旗製作や文化祭の展示・舞台発表、資格検定取得にも積極的に臨んでおり、彼女らを中心にクラス全体に努力する雰囲気が広まっていった。

5 結果と考察

(1) アンケート結果

今回実施した3回のアンケートの集計から、10項目中比較検討が可能な6項目を取り上げ、その結果を踏まえた考察を以下に示す。なお、質問項目⑩に関しては、アンケートⅡでのデータに不備があり、集計表からはその部分の結果を省いている。

ア 項目①「私にはいいところがいっぱいある」

表4を見ると、「とてもそう思う」又は「そう思う」と回答した生徒が、アンケートⅠでは23.5%だったのが、アンケートⅡでは41.1%になっており、自己評価が高くなっていると

考える。しかし、アンケートⅢでは、「全く思わない」と回答した生徒が増えており、学習の壁を感じたり、初めての資格検定の結果を受けて自信を失っている生徒がいくらかいるのではないかと考える。しかし、自分のよさを人から気付かされるような経験を積むことで、低い自己評価や自信の無さが改善され、自尊感情が一時的にでも上がる傾向が見られる。今後も折に触れ、第2回人権教育ホームルームで行った「褒める」のような取組を行うことで自尊感情は高まると考える。

イ 項目②「私は自分を大切にしている」

表5を見ると、「とてもそう思う」又は「そう思う」と回答した生徒が、アンケートⅠの62.9%からアンケートⅡでは69.9%となり、アンケートⅢでは更に72.3%と増えていった。このことは、学習や資格検定の結果はどうあれ、日々努力している自分をありのまま受け入れ、大切な存在として認めていることの表れであると考えられる。

ウ 項目④「私は目標や夢をもっている、あるいはもとうと努力している」

表6を見ると、「とてもそう思う」又は「そう思う」と回答した生徒が、アンケートⅠの72.2%からアンケートⅡでは83.9%と上昇し、自分への評価は一時的に上がった。しかし、アンケートⅢでは資格検定の結果などの影響からか、68.3%と下がっている。

エ 項目⑤「私のまわりの人は目標や夢をもっている、あるいはもとうと努力している」

表7を見ると、「とてもそう思う」又は「そう思う」と回答した生徒が、アンケートⅠでは80.4%だったのが、アンケートⅡでは92.8%と更に大きく上昇している。その後のアンケートⅢでも、86.4%と高い割合を維持している。自己評価に比べて、他者への評価が高い傾向がうかがえる。

オ 項目⑦「私は社会人になるためのビジネス教育を受けていることについて誇りに思う」

表8のアンケート結果からも分かるように、社会人となるための教育を受けていることに、高い誇りをもつ者が多い傾向にある。2学期の後半になってもそれはあまり変わっていない。したがって、規範意識の育成を押しつけと感じるような土壌はあまりないと考える。

表4 自己評価

	アンケート		
	I	II	III
3 とてもそう思う	2.6%	5.1%	5.3%
2 そう思う	20.9%	36.0%	23.0%
1 あまり思わない	67.7%	47.0%	56.2%
0 全く思わない	8.9%	11.9%	15.5%

表5 自己受容

	アンケート		
	I	II	III
3 とてもそう思う	5.6%	14.0%	12.8%
2 そう思う	57.3%	55.9%	59.5%
1 あまり思わない	33.3%	25.4%	23.3%
0 全く思わない	3.8%	4.7%	4.4%

表6 自己の目標や夢

	アンケート		
	I	II	III
3 とてもそう思う	26.9%	30.1%	19.4%
2 そう思う	45.3%	53.8%	48.9%
1 あまり思わない	24.8%	14.0%	25.1%
0 全く思わない	3.0%	2.1%	6.6%

表7 他者への評価

	アンケート		
	I	II	III
3 とてもそう思う	17.4%	39.0%	22.5%
2 そう思う	63.0%	53.8%	63.9%
1 あまり思わない	18.3%	7.2%	12.8%
0 全く思わない	1.3%	0.0%	0.9%

しかし一方では、ビジネス教育を受けていることを誇りに「あまり思わない」や「全く思わない」と考える生徒の割合は、アンケートⅢでは17.2%になり、1学期と比べて4%近く上昇している。資格検定の厳しさなどから、その取得を諦めてしまう生徒も、わずかだが増えつつある。

表8 ビジネス教育に対する誇り

	アンケート		
	I	II	III
3 とてもそう思う	23.4%	25.8%	24.7%
2 そう思う	64.3%	62.7%	58.1%
1 あまり思わない	11.5%	10.6%	15.4%
0 全く思わない	0.9%	0.8%	1.8%

カ 項目⑩「私は友達やまわりの人に頼りにされている」

表9を見ると、アンケートⅠを実施した1学期には、「とてもそう思う」と回答した生徒はわずか2.6%しかいなかったことが分かる。2学期に入り、創立50周年行事や体育大会、文化祭などの大きな行事が終わり、また、初めての資格検定を経験し、自分に少し自信をもった生徒が現れてきた。アンケートⅢで「とてもそう思う」と回答した生徒が増えたのは、そういった背景もあるだろう。しかし、全体としては6月当初とあまり変わりがなく、自信をしっかりともてるまで至っていないことがうかがえる。

表9 他者からの信頼感

	アンケート		
	I	II	III
3 とてもそう思う	2.6%	—	5.9%
2 そう思う	34.0%	—	29.3%
1 あまり思わない	51.1%	—	52.7%
0 全く思わない	12.3%	—	12.2%

(2) ワークシート

ここでは、人権教育ホームルームの際に使用したワークシートに記述された生徒の意見や感想について考察する。

まず、「褒める」をテーマとした第2回人権教育ホームルームでは、「自分が頑張っていることをできるだけ書いてみよう」という項目に対して、「規則正しい生活」や「身だしなみ」、「挨拶」、そして、「簿記」や「情報処理」といった新しい科目への取組を挙げる生徒が多かった。また、「エール交換（相手を褒める）」の項目では、「遅刻や欠席が無い」、「授業前の予習をしている」、「部活動に頑張っている」、「資格検定取得に努力している」や、個々人の性格面でのよいところなどを、とても優しい言葉を使って褒めていた。

「みんなからの言葉を読んでどう思いましたか」という問いに対しては、「みんなからのエールでとても励まされた」、「みんな同じような努力をしていて一緒に頑張っている感じがした」、「大爆笑するぐらい嬉しかった」、「みんな優しい言葉を書いてくれていて嬉しかった」、「心が温まりました」、「尊敬されて恥ずかしいけれど嬉しいです」、「人に認めてもらえることがこんなに嬉しいこととは思わなかった」など、素直に自分の喜びを表現していた。

このように、ワークシートに記述された生徒の文章を読むと、「前向きになれた」や「とても幸せな気持ちになれた」、「また、このような授業をやってほしい」など、おおむね肯定的な意見が多かった。また、互いに同じような努力をしていることが分かり、連帯感をもったという感想も多かった。逆に、周囲が努力していると分かったことで、かえって自分への評価が低くなり、全く努力をしていないのは自分だけではないかと書く生徒も一部には見られた。しかし、そのように書く生徒は、周りの生徒よりも自分に厳しく、実際には努力をしている生徒である可能性もあると考える。

2学期に実施した一連の人権教育ホームルームのワークシートでは、「デートDVにあっ

ている友人に相談されたらどうしますか」という問いに対して、「何もしない」と回答した生徒は極めて少なく、友人として何かしようとする者が多かった。「いじめが身近にあったらどうしますか」という問いに対しても、「何もできない」と答えた生徒は少なく、何か行動をしようとする者が多かった。このことは、自ら行動できる人権意識を育む学習としては一定の効果があったと考える。

また、「参加型学習で実際に被害者の気持ちを想像できましたか」という問いには、被害者の気持ちが「大変想像できた」又は「想像できた」と回答した生徒が全体の83%にのぼった。このように、人権を侵害された人の気持ちを参加型学習で想像できたことにより、積極的に人権侵害に対して行動しようとする人権意識の土台が幾分形成されたのではないかと考える。なお、デートDVやいじめなどの力による支配は、相手の人権を無視し自尊感情を奪う行為であり、それを行う側も自分に対する自信の無さが影響していると考えられる。従って、対等な人間関係が築かれることにより、自尊感情も育まれると考えられる。

(3) 考察

専門高校の場合、様々な資格検定取得への挑戦をはじめ、多くの自己実現の機会に恵まれている。一方で、その成否によっては自尊感情を著しく低下させるような事態が生じることもあり得る。周囲が努力して結果を出している中で、自分が結果を出せない現実に、何度も直面していくことになるかもしれない。そういうことから考えると、結果は厳しくても、多くの生徒の向上心は決して失われてはおらず、実際、日頃の学習や資格検定取得などに取り組む姿勢は高まっている。放課後に毎日補習を受ける生徒も増えている。したがって、自己評価を下げた諦めるのではなく、自分自身のありのままを受容し、努力できる生徒が増えつつある現状は評価できるのではないかと考える。

「褒める」をテーマとした第2回人権教育ホームルームが有効であるのは、互いの頑張りを認め合える点にある。クラスの中で、互いの努力を身近に見ていても、日頃は口に出して褒めることはあまりしない。挨拶をする、服装・身だしなみを整える、遅刻・欠席をしない、集団行動ができる、そして専門教科を学習し各種資格検定取得へ挑戦する、これらは誰もがしている「当たり前」のことである。そして、このような「当たり前」の努力が、社会人になるための活路を開いていくことになり、卒業後の進路の幅を広げることにもつながる。たとえ「当たり前」ではあっても、日々努力していることを互いに認め合えれば、結果はともかく、自分に自信がもてるようになり、自己評価は自ずと上がってくる。他人から認められることで、「もっとやってみよう」と思えるようにもなるだろう。また、自分に自信がもてれば、他人のことも考えられる余裕が生まれてくる。今回実施した一連の参加型の人権学習が効果を発揮するためには、こういった他者との関わりが欠かせない。

6 おわりに

本校の生徒は、アンケート結果などからも分かるように、自分に対して少し自信がない生徒が多い。東京都が行った自尊感情の調査結果からも、一般に中学3年生から高校2年生にかけて自尊感情は低下する傾向にある。中でも、自己評価・自己受容に関する項目、「自分にはよいところがある」や「自分を大切に思える」などではその度合いが大きい。本校でも自己評価が下がり、自尊感情が低下していく生徒が、今後増える可能性はある。しかし、本校の生徒は「社会人となるための教育を受けていることが誇りである」という思いが強く、そこに自信の

より所がある。この思いをもち続ける限りは、今後、資格検定取得の学習が難しくなって結果が出なくても、努力しようとする向上心を失うことはないであろう。そして、日々努力をしていることを互いに認め合える他者の存在に気付かせる取組があれば、自己評価が低下してやる気を無くしてしまうようなことにはならないだろう。したがって、本研究で示したような「褒める」のような人権学習の取組を計画的・継続的に行うことによって、自分のよさに気付かせるとともに、自尊感情の低下を予防できるのではないかと考える。また、主体的な学習を促すために参加型学習を取り入れたが、今後は積極的に参加しようとする姿勢を大事にするとともに、自分の問題として受け止められるような学習を重ね、人権意識を育み、人権を守る行動へつなげることができれば、自分に自信をもつことができ自尊感情も育まれると考える。

脚注

- *1 構成的グループエンカウンターにおいて、他者理解を進めるための基本的なエクササイズの一つ。同じ好みをもつ者同士を集めることにより、自分と他者との共通点や相違点を確認し、互いの理解を深めることをねらいとする。
- *2 アイスブレイキングとして、ワークショップの導入などでよく用いられるショートエクササイズの一つ。「バースデーライン」や「バースデーチェーン」と呼ばれることもある。非言語的コミュニケーションの練習や、なかまづくりの手法としても有効とされる。
- *3 加害者が被害者に「指さし」をすることによって、人権侵害される人の気持ちを理解させる手法で、「人権ワークショップ研究会」の白井俊一氏が考案したもの。部落解放同盟奈良県連合会の古川政也氏による本校職員研修の講義の中で、この「指さし」を用いたワークショップが紹介された。
- *4 「ヒモ」を用いて特定の人間を囲んだり、「ヒモ」を張ることによって関係性を分断するこの手法は、前述の古川政也氏の提案により導入した。本来は目に見えない心の壁を、視覚的に表現できる利点がある。
- *5 東京都は平成20年度から「自尊感情や自己肯定感に関する研究」を5か年計画で継続的に実施し、児童・生徒の自尊感情の調査や分析を行っている。自尊感情を扱うに当たっては、従来の心理学で扱ってきた自己評価的な側面だけでなく、人との関係性の中でのあり方や将来も含めた自分に対する信頼感など多様な要素が求められると考え、「自己評価・自己受容」、「関係性の中での自己」、「自己主張・自己決定」の3つの因子を併せもつ独自の『自尊感情測定尺度』を考案した。これを用いて、都内公立小学校（5、6年）・中学校・高等学校を対象に学年進行に伴う自尊感情の変化を明らかにした。

参考・引用文献

- (1) 野崎志帆、平沢安政（2001）「人権教育におけるセルフ・エスティーム概念とその位置づけ」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第27巻 pp. 109-121
- (2) 國分康孝監修（1999）『エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集』図書文化社 p. 110
- (3) 國分康孝監修（1996）『エンカウンターで学級が変わる 小学校編』図書文化社 p. 112
- (4) 奈良県くらし創造部男女共同参画課（平成20年）『高校生のための“しない、されない、デートDV”』 pp. 1-6

- (5) 東京都教職員研修センター（2010）「自尊感情や自己肯定感に関する研究 第3年次」
『平成22年度紀要』

http://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/information/kenkyuhoukoku_kiyou/houkoku22.html